

第10回 同志社大学グローバル地域文化学会学術講演会

グローバルに見る若者の「不安」と「希望」

日 時：2022年12月14日（水）18:30～20:30

場 所：同志社大学烏丸キャンパス志高館110教室

主 催：同志社大学グローバル地域文化学会

企画・運営：2022年度GR学会学術講演会実行委員会

企画・運営・登壇者（五十音順）：

井上慧真（帝京大学文学部教員 [ゲスト]）

上田皇輝（グローバル地域文化学部・ヨーロッパコース1回生）

岡本京子（グローバル地域文化学部・ヨーロッパコース3回生）

加藤結子（グローバル地域文化学部・ヨーロッパコース3回生）

加藤由佳（グローバル地域文化学部・ヨーロッパコース3回生）

響田竜蔵（同志社大学社会学部教員 [ゲスト]）

坂本南美（グローバル地域文化学部教員）

津田琳音（グローバル地域文化学部・アメリカコース1回生）

堤 翔太（グローバル地域文化学部・ヨーロッパコース1回生）

水谷 智（グローバル地域文化学部教員）

米倉嘉陽（グローバル地域文化学部・アジア太平洋コース2回生）

## 1. 開会の辞

**加藤（由）** これより第10回グローバル地域文化学部学術講演会「グローバルに見る若者の「不安」と「希望」」を始めたいと思います。司会をつとめますのはグローバル地域文化学部ヨーロッパコース3回生の加藤由佳です。

**加藤（結）** ファシリテーターを務めます同学部ヨーロッパコース3回生の加藤結子です。

**加藤（由）** まず、グローバル地域文化学会会長・宇佐見耕一先生より一言お願いします。

**宇佐美** グローバル地域文化学会会長の宇佐見です。本日はご参集くださいます。ありがとうございます。この学術講演会は今回で10回目ですが、本学部もまもなく創立10周年を迎えようとしています。このイベントは従来はゲストに講演をしていただく形式で行われていましたが、ここ数年は本学会の学生会員の主導で企画・運営を行う方向で行ってまいりました。本日の講演も学生が行い、お二人のゲストの先生方からコメントをいただくかたちとなります。この機会を、学生たちの問題意識を深く共有し、それについて共に考える場にできればと思いますので、皆様、どうぞ最後までお付き合いください。

**加藤（由）** ありがとうございます。続きまして、今回の学術講演会の趣旨説明を加藤結子さんからお願いします。

**加藤（結）** 会長の挨拶でも紹介されていたとおり、グローバル地域文化学会では新しい試みとして過去数回、学部生の会員が主体となって学術講演会の企画・運営をしてきました。今年度も学生を中心にテーマについて検討しましたが、話し合いのなかで、コロナ禍、格差・貧困、年金、就職などが候補として挙がりました。これらのテーマに共通するのは、人生設計に関する「不安」であり、そしてそれを感じているのが我々が「若者」であるということに気づきました。また、我々は日本という「ローカル」な

文脈にありながら、同時に「グローバル」なものにつながっているという認識のもとにこの学部で学んできました。そこで我々だけでなく、世界の若者の共通の感情として「不安」をテーマにすることを思い立ちました。我々が身近に感じている「不安」はグローバル化が進む時代にあって世界の諸地域でも経験されているのではないかという仮説をたて研究を始めました。そしてその先に「希望」について考える糸口もつかめると考えたのです。

今年度の講演会のひとつの特徴は、学生会員が自分たち自身の身近で喫緊の課題を学術的テーマとしてとりあげたことです。過去2回の講演会では、移民・難民問題や障がい者差別への人種差別・偏見等を扱うことでグローバル地域文化学部にとって重要なテーマである「他者」について考察してきました。本年度の講演会では、私たちグローバル地域文化学部の学生自身も議論の対象である「若者」に含まれます。

現在、若者は世界的に「不安」に直面しています。直近の原因としてはコロナ禍、ウクライナ戦争、そしてそれらによって引き起こされた経済不況が挙げられます。しかし、若者をとりまく状況はそれよりずっと以前からすでに厳しくなっていました。若者が現在、予測が難しくライフデザインが立てづらい時代を生きていること<sup>1</sup>、そしてそのことが「希望」の喪失につながっていること、が研究者によっても指摘されています<sup>2</sup>。

本講演会で私たちがフォーカスする「若者」とは、ライフプランを立てている段階に位置し、それに向けて一步を踏み出そうしている人生の移行期にある人々の集団を指します。かれらが必ずしも集団としての自意識を持っているわけではありません。歴史上、若者という存在は移行期に位置するという共通点以外は不均一な人々の集まりであり、集団的な自己主張のために組織化されてきたわけではありません。また、ジル・ジョーンズとクレア・ウォーレスのように、現代において若者の社会参加が限定され、かれらが自立できずに不利益集団になりつつあることを問題視する研究者もいます<sup>3</sup>。

本日ゲストコメンテーターとしてお招きした井上慧真先生は、著書『若者支援の日英比較』のなかで、「青年期への移行」が、従来の社会的不

平等に加えてグローバル化に伴う労働市場の変化といった新しい社会問題とも接続している、と指摘しておられます。井上先生は、こうした状況のなかで若者をいかに支えるかを重要な課題として位置づけておられます<sup>4</sup>。同じくゲストコメンテーターの轡田竜蔵先生も、著書『地方暮らしの幸福と若者』のなかで、イギリスの社会学者ジョック・ヤングの論考を参照しながら<sup>5</sup>、包摂されたマジョリティと排除されたマイノリティという二項対立的な認識ではなく、社会の大部分の人を覆い尽くしている「不安」の領域に着目する議論を展開されています<sup>6</sup>。

こうした研究と我々の研究はどうつながってくるのでしょうか。今回の調査は、若者としての当事者意識をもつ本学部の在籍生が、世界の各地域の大学生にアンケートをするものです。もちろん、これで「若者」のすべてがカバーされているわけではありません。しかし、ひとつの重要な例として、若者のリアルな声を引き出して議論する一助になるのではないのでしょうか。とくに、グローバルな観点から若者の不安と希望について考えるうえで有効ではないかと考えております。

それでは、コメンテーターとしてお呼びしている2名の先生をご紹介します。

**加藤(由)** まず、同志社大学社会学部社会学科の轡田竜蔵先生です。ご専門は地域社会学、グローバリゼーション研究、若者研究です。先生、一言ご挨拶をよろしくお願いします。

**轡田** 専門は地域社会学ですが、こちらはグローバル地域文化学部ということで、地域という概念で結びついているわけです。しかし、日本語の地域という言葉にはかなりの幅があります。グローバル地域文化学部の方はエリア・スタディーズとか、リージョナリズム等の概念で対象化される、より国際的な地域です。一方、地域社会学はローカルな日本の地方、地域に関する話題が多い分野です。ただ、私自身は「地域」と翻訳される言葉のつながりを研究生活の中で考えてきて、卒業論文から大学院時代、キャリアの始めのころは国際社会学を専門とし、在日の中国人の調査をやっていたんですが、たまたま地方の大学に赴任して、そこで地方の若者調査を

始め、地域社会学に移行していったという経緯があります。グローバル化という共通の背景のもとで、日本のローカルな現場にいる若者と、海外の若者の「不安」と「希望」との関連を考えてきた者として、今回の講演会でどのような話題が提供されるのか、非常に楽しみにしています。よろしくをお願いします。

**加藤（由）** ありがとうございます。続きまして帝京大学文学部社会学科の井上慧真先生です。ご専門は社会学、教育社会学、青少年問題です。井上先生、一言お願いします。

**井上** このような場にお招きをいただきまして大変光栄に思います。ありがとうございます。私は大学院生の頃から、学校を途中でやめてしまったり、いなくなってしまうたり、職についたが、すぐやめてしまったりという形で、何らかのきっかけで社会とのつながりが切れてしまった若者をどのように支援するかを研究してまいりました。京都市内の若者支援機関の方にはたくさんお世話になってきました。同時にイギリスなど海外における若者支援の事情についても研究しています。本日の発表を大変楽しみにしております。どうぞよろしくお願いします。

**加藤（由）** 本日の講演会の流れを説明します。まず、学びの対象となる地域にそって3つのコースに分かれるグローバル地域文化学部の特徴を活かし、ヨーロッパ、アジア、アメリカの3つの地域の若者に関する調査結果を学部生の学会員が発表します。次に、お二人のゲストの先生方より発表に対するコメントをいただきます。最後にフロアを交えた全体議論を行います。

**加藤（結）** 今回の学生報告のもとになる調査のリサーチ・デザインについて説明します。若者の生の声を収集するため、「About Future」「About Career」「About Education」「About Life」といったテーマに沿ってヨーロッパ、アジア・太平洋、アメリカの各地域の現地学生にアンケートをとりました。アンケートはインターネットを用いてオンラインで配布・回収しました。配布にあたっては、各地域の大学につながりをもつ本学部の先生方や現在海外の大学に留学中の本学部生の協力をえました。そのため、回答者は主に大学生となっています。また、アンケートに加えて、一部、個別インタ

ビューなどによって調査を補完している部分があります。時間的な制約もあり、地域や国によって調査の対象人数にばらつきがでてしまったことは今後の課題として残りました。

## 2. 学生会員による発表

### 2-1. ヨーロッパ

担当者：上田皇輝／加藤結子／岡本京子／堤翔太

**加藤（結）** ヨーロッパ地域に関する発表を始めます。発表は加藤結子と上田さんの2人で分担しておこないます。

**上田** 上田皇輝です、よろしくお願いいたします。

**加藤（結）** 本日の登壇者は2名ですが、企画・運営にはほかのヨーロッパコースの学生も参加しています。岡本京子さんは派遣留学生として現在ノルウェーに在住のため、また、堤翔太さんは部活動の試合のため、本日は発表に参加できませんが調査に加わっていただきました。以下、発表はアンケート結果の分析、観点別のまとめの順に進めていきます。

まず、アンケートの概要について説明いたします。回答者は「母国がヨーロッパに属する」と認識する若者80人です。学歴は「学部以上」が、年齢は「20～25歳」が最も多いです。「国籍」は西ヨーロッパの国々の出身者が最も多いですが、これには調査に協力していただいたグローバル地域文化学部の学生の留学先がどこであるかが影響しています。出身階層ですが、親の収入が平均的な水準の中間層が多いのですが、特にこの層の「不安」に目を向けることが可視化されたマジョリティの特徴を明らかにする意味でも重要であると考えています。

**上田** それではまず、アンケートのなかの「不安」に関する部分についてです。「将来に対する不安」を10段階評価（高いほど不安が多い）してもらった結果、7と8が多い結果となりました（図1）。平均は6.4であり、全

体的に将来に対して「不安」をもつ人が多いことが分かりました。

不安の具体例としては、個人的なものからグローバルな規模のものまで様々なものがあることがわかりました。我々が特に関心を寄せたのは「気

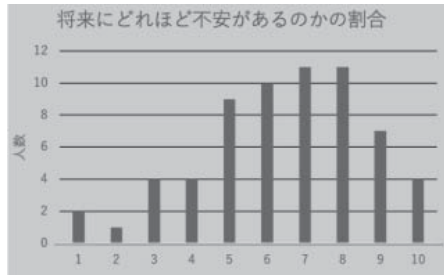


図 1

候変動」と「戦争」にかんする不安です。日本に住む私たちにとって、戦争と気候変動は不安の種類としてはあまり縁があるものではありませんが、アンケートでこれらが挙げられている背景には、SDGsの推進、先進的なエネルギー政策、ウクライナ戦争など、ヨーロッパでリアルタイムで起きていることが関係していると思われます。

「将来にどれほど希望があるか」という質問に対しては、10段階中7が12人（15%）と最も多く（図2）、平均的でも6.4と高くなっています。これは「将来に対する不安」に関する質問と同じような数字で

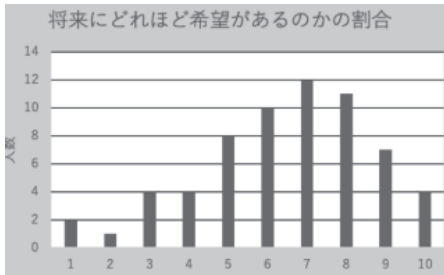


図 2

することから、将来に対する「不安」が高い半面、将来への期待も高いことがわかります。「希望」の具体例としては、「社会的に自立する」「平和で安全な暮らしを実現する」「社会貢献をする」などがみられます。「まだ見つけていない」という回答もあるものの、多くの人が将来に対して夢や希望を持っていることがうかがえるアンケート結果となっています。

**加藤（結）** 続いて「キャリア」についてです。「成人への移行期」にある若者にとって、キャリアの展望が将来の「不安」と「希望」の両方に深く関わってくるのは想像に難くありません。そして、キャリアと切っても切れない関係にあるのが学歴です。アンケート結果からも、ヨーロッパの若者

がふたつの相関関係を認識しているのは明らかです。ただ、国によって微妙な違いもあらわれています。若者の失業がより深刻なスペインとイタリアでは学歴に関係なく困難な状況があるようです。アンケートでは、スペイン人やイタリア人の回答者は、学歴に関係なく「ほとんどすべて」の若者が職探しで困難に直面すると答えています。一方、オランダ、デンマーク、イングランド、フランスの若者で「ほとんどすべて」と答えた人はひとりもいませんでした。やはり、就職をめぐる困難さの度合いは、学歴に左右されると認識されているようです。かれらのちょうど半数が、「学歴による」と回答しました。

就活の困難さの具体的内容を記述式で問う質問には様々な回答が寄せられました。大まかに分類すると以下ようになります：①機会が少ないにもかかわらず若者に実務経験が求められる矛盾；②就きたい仕事と実際の求人をめぐる理想と現実のギャップ（内容と報酬の両面において）；③高学歴化による競争の激化；④学歴や属性（「人種」等）による差別。特に①は多くの人々が指摘しており、ヨーロッパ全体の特徴であるといえるでしょう。

キャリアに何を希望するかについての質問には、「自分のライフスタイルを維持できる報酬があれば十分」、「好きなことができる仕事に就ければ良い」、「自立的した健康なストレスのない生活ができる仕事につきたい」、「学士号に関連した仕事ならなんでも良い」、「好きな国で良い人たちと仕事したい」といった回答がみられました。一方で、「分からない」「思いつかない」「未定」などの回答が目立ちました。全体的に、高給や出世を望むよりは、安心・安定を望む傾向が読みとれます。具体的に挙げられた職種は、政治家、教師、会社員、研究職など、多種多様でした。

ヨーロッパの若者は、「不安」「希望」をキャリアとどう結びつけているのでしょうか。これに関して、少なくともふたつ指摘できると思います。ひとつは、多くの若者がキャリアと家族形成を結びけて考えていることです。例えば、フィンランドのある学生は、「自立のための資金というより、家族を養う資金を稼げるかどうか」が「不安」であると答えています。結婚し、新たな家族をつくるのが「希望」として挙げられる一方、それに



かかる経済的な重圧が「不安」へとつながります。この点において「不安」と「希望」は表裏一体の関係にあるといえます。もうひとつの点は、勤勉を「不安」を乗り越える手段として見出す若者が一定数存在することです。例えば、スペインのある学生は「収入や家族、キャリアが心配」と答えつつ、そうした「不安」に対処するための手段として「ワークハード」を挙げています。ノルウェー在住のルーマニア人のある学生は「努力し続けること」に「希望」を見出し、複数のキャリアプランに対して現実的な回答を複数記述しています。こうした回答には、大学生であることから生まれるエリート意識よりも、自助努力によって厳しい現実に適応しようという意識が読み取れます。大学生の多くが労働者階級出身ではないかもしれませんが、こういった現実志向は、轡田先生が著書で論じておられる労働者階級的な「勤勉さ」と通じるものがあるのかもしれませんが<sup>7</sup>。

続いてノルウェー留学中の岡本さんが調査した教育制度に対する若者の意識についてです。母国の教育制度に対する満足度を問う設問に対する回答の全体平均は10段階中7.15でした。ただ、最高値は9で、10との回答がなかったことから、いずれの国の教育制度にも改善の余地があると言えるでしょう。複数人からの回答が得られた国のなかで平均が7ポイント以上の国はデンマーク、オランダ、ノルウェー、ドイツでした。一方、スペイン、オーストリア、ポーランドは5前後に止まっており、一口にヨーロッパといっても、国によって大きな差があることが読み取れます。母国の教育の良い点として上げられた中で最も多かったのが「教育費が無料または安価である」こと、そしてそのために「社会的・経済的背景がそれほど問題とならず、誰でも教育へアクセスできる」という点でした。また印象に残ったのは、ノルウェーの学生の「進路について考え直し、やり直したり、学位を変えたりすることができるのが良い。自分のやっていることが気に入らなければ、変えるのに遅すぎるといことはないと感じる」という回答です。岡本さんが現地の学生から直接聞いた話によると、ノルウェーの多くの大学では、高校の成績が大学入学時の合否基準と異なるため、高校卒業から時間が空いても受験しやすいそうです。例えば岡本さんが留学しているベルゲン大学日本語学科の学生のうち、高校卒業の次

の年に入学した学生は1人のみであり、すでに別の学位を取得済みで2つめとして入学した人も複数人いたそうです。

自国が今後とるべき教育の改善案を問う質問に対しては様々な回答が寄せられましたが、大まかに以下の8つに分けられます：①社会で役立つ実践的なスキルの提供；②職業訓練的なものではなく思考力の強化に重点を置く教育；③教員の待遇向上；④精神的問題を抱えていたり、学力が低い学生に対するケア；⑤学費補助などを通じた学生への経済支援；⑥学業成績以外の評価基準の設定；⑦暗記や論理だけでなく自主性や創造性を重んじる学習形態；⑧専門にとらわれない多様な学びを可能にするカリキュラム。見てのとおり出された案は多様で、①と②の関係にみられるように、互いに相反する場合があります。⑤が、教育に対する国の補助が特に少ない国出身の学生から出されたことは示唆的です。学費の問題がいかに大きいかを物語っています。⑥が、大学入試時に高校の成績がその可否の軸となるノルウェーの学生から多く出たことは興味深いです。

**上田** 次に「将来のワークライフバランス」についてです。仕事と休暇に費やしたい時間の割合についての質問への回答からは、やや仕事を重視する傾向がみとれます（図3のグラフの左の棒が「休暇にとりたい時間」の

将来、仕事と休暇に取りたい時間の割合(1~10)

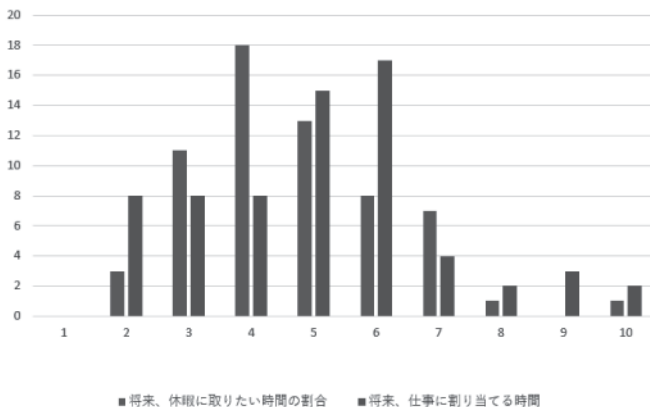


図3

割合を、右の棒が「仕事にとりたい」割合を表している)。「十分に休暇をとれているか」という質問に対しては、10段階評価(十分であるほど高数値)で3、4、7の順で多く、二極化する傾向があるものの、どちらかという「不十分」と感じている傾向が強いことがわかりました(図4)。

次に、「将来の夢や目標」についてです。アンケート結果には「国際司法」や「パイロット」のような具体的な職業名が出てきます。一方で、「平和な暮らしを過ごしたい」「自分の将来を社会に生かして、さまざまな文化に触れたい」といった、抽象的な回答もありました。

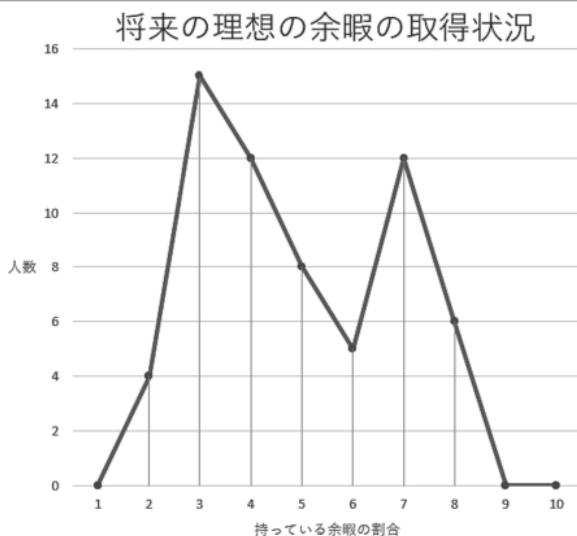


図 4

**加藤(結)** ヨーロッパに関するまとめに移る前に、本調査の限界に触れておきたいと思います。まず、アンケートの対象になった人々が、「若者」とはいても、実際には大学に在籍している人々に限られてしまったということです。ヨーロッパには大学に進学しない人々も多く存在します。今回の調査はそういった人々の声をすくい取るものになっておらず、各国における若者の間の経済的、社会的格差が見えにくくなっています。また、主に本学部の学生が留学先している大学でアンケートをとったことで、国

による偏りがあります。さらに、ヨーロッパにはヨーロッパ以外の地域からの移民とその子孫が多く存在し、そういった背景をもつ大学生も多く存在するはずで、これらの点に鑑みて、今回のアンケート結果はヨーロッパの多様性を反映したものと必ずしもなっていません。

こうした限界にもかかわらず、ヨーロッパの若者の生の声を聞くことの意義は十分にあったと思います。特に、リアルタイムの若者意識を垣間見ることができたことは興味深かったです。上田さんの報告にもあったとおり、ヨーロッパでは若者が環境、戦争、格差といった現代的なテーマを「不安」と結びつけ考えています。社会を覆う不安感が、若者ひとりひとりに影響を与え、また、そうした個人の不安感がさらに全体の不安感を高めている可能性を感じます。この点において、社会全体の不安感が個人の意識に作用し、さらにそれが全体に影響を与えてしまうことを示す田辺俊介氏による研究は示唆的だと感じます<sup>8</sup>。

## 2-2. アジア太平洋

アンケート結果分析

担当・報告者：米倉嘉陽

**米倉** 今回のアンケートは、ヨーロッパ地域および北アメリカ地域と比較できるように項目を同じものにしました。回答者は40名の大学生で、うち中国人が26名、日本人が7名、韓国人が5名、ラスオオ人が1名、フィリピン人が1名となりました。年齢は20～25歳が最も多く、34名です。

「将来について不安があるか」という質問に対しては、10段階中（1が「最

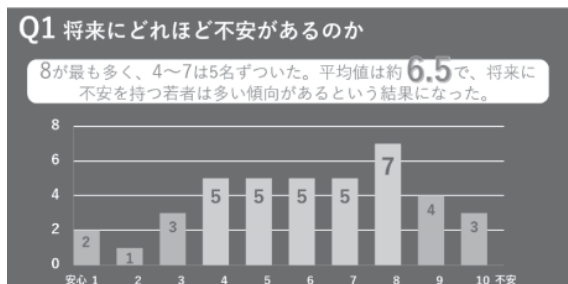


図5

も安心」～10が「最も不安」8と9と答えた人がそれぞれ4名ずつで計40%と最も多くなりました。平均値は6.5です（図5）。



図6

この結果から、アジアでは将来に不安をもつ大学生の若者が多い傾向にあることがわかります。具体的に何に関して不安かという質問に対しては、「就職への不安」を挙げる人が最も多く、次に「生活」「収入問題」「住居問題」「人間関係」となっています。「将来に対する希望はどれほどあるか」という質問に対しては、これも8と答えた人が最も多く、次に10と答えた人が多いことが分かりました（図6）。平均値はこれも6.5で、将来に強い希望をもっているアジアの大学生が多いことがわかりました。「希望」の具体例としては「高賃金」を挙げた人が多く、また「快適な生活」「自立した生活」などといった生活スタイルに関するものも挙げられました。人間関係に関するところでは、「結婚する」が多く寄せられ、また、「同性婚の認定」など婚姻に関する法律改定を求める声もありました。

次に「キャリアア」についてです。「仕事探しは困難だと思いますか」という質問に対し、ほとんどの人が「はい」と答え、38

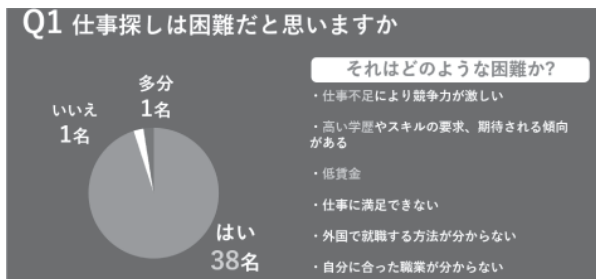


図7

名（95%）となりました。困難の具体例としては、「職不足」「求められる学歴やスキルのレベルの高さ」「低賃金」、等でした（図7）。さらに「具体的なキャリアゴール」という質問に対しては、弁護士、ファイナンシャ

ルアナリスト等の具体的な職種を挙げる人がいた一方、「自分にあった職」「楽しいと思える職」など、具体的にはまだ決めていない人も多くの割合を占めていました。また、「わからない」「まだ決めてない」と答えた人も一定数いました。「夢を実現させるために何をしているか」という質問に対しては、ほとんどの人が「学習」と答えた一方、「わからない」「努力をしていない」と答えた人もいました。

次に「教育」についてです。「義務教育でキャリア対策を受けたことがあるか」という質問に対しては、「ある」と答えた人が22名(55%)で、

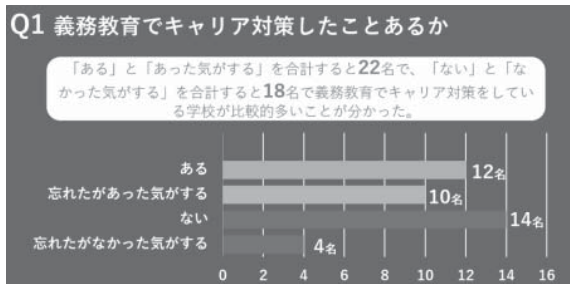


図8

「ない」と答えた人が18名(45%)となりました。「ある」と答えた人のなかで、具体的なキャリア対策として挙げられたものは、進路カウンセリング、ビジネス英語対策授業、性格診断テスト、等でした。専門学校の場合は、長期間の実務授業が例として挙げられました(図8)。「あなたの国の教育の良いところはどこか」という質問に対しては、中国の回答者からは「教師による手厚い試験対策」「英語教育」,「勉強して大学に進学することで貧しい地域の学生でも都市に就職できる機会がある」、等が挙げられました。韓国の回答者からは、「ほとんどの国民が大卒で、最低でも高校を卒業しているため平均的に国民のレベルが高い」という意見が出ました。ラオス、フィリピン、日本では、「教師のレベルが高い」「小中学校で様々な教科を勉強することができ、将来に役立つ」等、類似した意見が挙げられました。一方、変わった意見としては、「中国より良いと感じているところ」という意見が台湾から挙げられ、国同士を比較している姿勢が見受けられました。「教育で改善してほしい点」という質問に対しては、中国や韓国では「受験競争」が学生のストレスになっていることが分かりました。日本とフィリピンでは「言語教育を改善してほしい」という意見が多

く見受けられました。

次に、「人生」についてです。「仕事」と「私生活」のふたつにどれくらい重点を置くかその割合を質問したところ、平均で、仕事42.5%に対し私生活で57.5%となり、やや私生活重視の傾向があることがわかりました[1]。「仕事以外の夢や目標はなにか」について質問したところ、「視野を広げるためにアメリカで勉強したい」と答える人がいました。また、「趣味」の実現と答える人も多くいました。

ここで、アンケート結果を踏まえての考察に入ります。まず、今回の調査では、対象が学生であることを考慮する必要があると思います。同じ若者であっても、社会人とは「不安」と「希望」の質が異なる可能性があります。ある研究は、就職後に若者が感じるストレスとして「対人関係ストレス」「妨害的要素ストレス」「過度の負荷ストレス」「能力欠如感ストレス」を挙げています<sup>9</sup>。「不安」や「希望」は、就職をさかいに変化する場面が多いと考えられます。その点も考慮して、今回のアンケート結果を考える必要があるかと思えます。

次に、発展途上国と先進国では、若者が教育について考える際の基準が違うのではないかと疑問に思いました。発展途上国においては義務教育制度がまだ不十分であり、先進国と安易に比較することはできません。アジア地域は先進国と発展途上国が混在しており、国によって義務教育の長さが異なり、ラオスは5年<sup>10</sup>、日本は9年<sup>11</sup>、中国は9年<sup>12</sup>、韓国は9年<sup>13</sup>、フィリピンは13年<sup>14</sup>となっています。一番短いラオスとフィリピンの差は8年にもなります。今回の調査のように「アジア」と一括りにして、同じ質問項目でアンケート行ってよかったのか、という疑問も生まれました。

最後に、ワークライフバランスについて、残業等の労働をめぐる考え方の相違を考慮しなければならないのではないかと感じました。例えば日本では「残業は当たり前」という風習があります。アジアでも国によって残業に対する考え方に違いがある可能性があります。このことが、アジアの若者の「不安」と「希望」にどのような影響を与えるのでしょうか。こうした点について考えるための資料を今回見つけることはできませんでしたが、今後の調査の課題として重要だと思います。

## 「なぜ海外留学を選択する中国の若者が多いのか」

担当者：加藤由佳

**加藤（由）** 私の発表では、なぜ海外への留学を選択する中国人学生が増えているのかについて考察します。このテーマを選択した理由としては、私自身が中国にルーツをもち、それが関係して留学先のカナダで中国人コミュニティの人々と多く交流をもつことになったことが挙げられます。その際、たくさんの人々から将来の不安に関する相談を受けました。それが、このテーマを選択した理由のひとつです。私の調査では、高校からカナダへ留学をした中国人学生8名と中国に留学経験がある日本人学生4名の計12名に5つの質問をしました。

1つ目の質問「将来に対する不安はあるか」という質問に対し、ほとんどの人が「不安をもっている」と回答しました。具体例として多かったのは、大学院への進学および卒業後の進路に関するものでした。より詳しくみると、大学院で何を専攻するかに関して、就職に有利かどうかを優先すべきなのか、あくまで自分の興味のあるものを選ぶのか、に関する悩みです。一方、未来が不確定なことを楽しみにしていると回答した人もいました。

2つ目の質問「自分の将来に対してどのようなプランをもっているか」に対しては、中国に留学している日本人留学生からは、「語学力と興味を活かせる仕事に就けるようキャリアを積んでいきたい」といった、留学を「希望」「夢」と結びつける積極的な意見ができました。対照的に、中国人留学生の意見は、「大学院卒業後、中国に戻る」「現地に残って安定した職につきたい」「ローンで家を買って家族を築きたい」といった、より現実的な意見がほとんどでした。日本人留学生と比べて、中国人留学生が安定思考なことがこの質問への回答からも読み取れます。

ここで中国の若者の傾向を少し紹介します。近年、中国では「タンピン」（躺平）や「バイラン」（摆烂）という言葉が流行語となっています。競争社会のなかで周りと自分を比較することをやめてしまうことや、何もせずにいる姿勢をとることを指しています。こうした言葉は、高望みせず



に一步步着実に進もうとする若者が急激に増えていることを示しています。懸命に頑張っても生活がよくなるなら頑張ることそのものをやめてしまう、という考え方が若者のあいだで広がってきているのです。これがある種の「安定思考」につながるのかなと私は考えています。

3つめの質問は、留学の動機です。まず、中国留学をした日本人の若者からは、「中国語を勉強したい」「中国の文化に興味がある」「経済が発展しているから、将来有利なのではないか」といった回答がありました。ここでは、特に母国に対する不安は見られず、中国留学への積極的な意味づけが見てとれます。対照的に、北米留学を選択した中国の若者からは、母国で学び続けることの「不安」が吐露されています。例えば、「中国の詰め込み主義教育や政策が嫌だから」「国内のプレッシャーが大きすぎる」「性的マイノリティとして生き辛い」「海外のほうが個性を殺さず、自分らしくいられる」などの意見が目立ちます。

ここで中国人留学生の回答の背景にあると考えられる経済と国家政策の現況について簡単に説明したいと思います。近年中国では、自国の経済に希望を見いだせず、親が早い段階から子供を海外に送り出す風潮が出てきていますが、やがては家族ごと移住することが最終的な目的だと思われます。また、住宅ローンが返済できないが故に自宅を売ってしまう現象が起きています。2017年度には9000戸だった売却数が、2022年に333倍の300万戸に激増しているのです<sup>15</sup>。これらは中国経済の厳しい状況を物語っていますが、ロックダウンにみられるような過度のコロナ感染症対策が人々の不安・不満を増幅させています。重要なことは、これらの問題のしわ寄せが若者にいつていることです。16～24歳の若者失業率は約20%と非常に高くなっています<sup>16</sup>。こうしたなか、若者の政治への不満は高まっています。ゼロコロナ政策に対する最近のデモについては日本でも報道されています。中国では言論の自由が規制されてきましたが、それに加えて行動が制限されていることで、この政策を推進する政府への若者の不満が爆発寸前になっているのです。3年に及ぶコロナ禍の影響は、特に大学生と10代の若者に深い影を落としています。友人のひとりには、「中国政府のデジタル検閲には、もうこりごりだ。この環境から抜け出したい」と、私に漏

らしています。

4つ目の質問「留学はどのような面で将来に役立つか」に対しては「人脈が広がる」「外国の人々とのコミュニケーションが可能になる」「海外への恐怖心がなくなる」「視野が広がることで新たな価値観が身につき、自分自身の能力が上がるとともに自信をもてる」という意見が多かったです。これに関しては、日本人学生も中国人学生も同じような感じでした。

5つ目の質問「留学後は母国に戻って就職するのか、それとも海外に定住するのか」に対して、中国に留学した日本人留学生のほとんどは「帰国する」か、あるいは「現地に残ることも検討している」、と回答しました。対照的に、カナダに留学している中国人留学生のほとんどは「海外へ移住したい」という意見でした。やはり海外留学を選択する中国人留学生は、中国国内の情勢や制度に不満がある人が多い印象を受けます。

以上が中国フォーカスのプレゼンテーションです。ありがとうございました。

### 2-3. 北アメリカ

担当・報告者：津田琳音

**津田** アメリカコース1回生の津田琳音です。「北アメリカの若者の不安」について報告いたします。中南米についてもアンケートを実施したのですが、回答が集まらなかったため、今回は分析の対象外とさせていただきます。

アンケートはアメリカ合衆国とカナダの大学生を対象とし、回答期間は2022年11月28日から12月8日でした。回答者数が23人と少ないため、この地域の社会情勢に関する私なりの考察を交えながらの報告となります。アメリカとカナダは州によって政策が異なったりするので、アンケートではどこの州の出身かという質問項目も設けました。

まず、「どれくらい将来に不安を抱いているか」あるいは「希望をもっているか」という質問に関してです。10段階中、「不安」(図9)が平均で

8.23、「希望」が7.7という結果でした(図10)。この結果から、不安を多く抱えつつも、希望もしっかりともっている人が多い、ということがわかり、ちょっと意外な結果でした。

「何に関して将来が不安か」という質問に対しては、23人中12人が「キャリア」、8人が「家族や自分の子ども」と回答しました。また「何に関して希望を持つか」という質問に対しては、23人中

How much do you worry about your future?

23件の回答

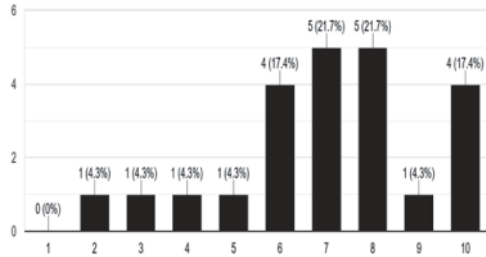


図9

How much are you hopeful about your future?

23件の回答

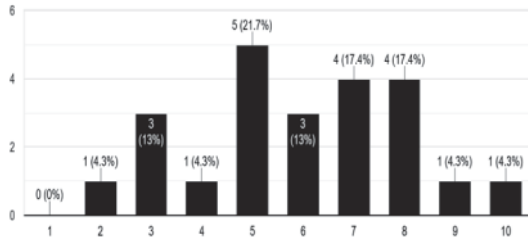


図10

9人が「自分の家族をもつこと」「安定した生活」と答えました。この二つの質問に対する回答から、「仕事」と「家族」が北米の若者の将来像の多くの部分を占めていることがわかります。しかし、一口に安定した生活といっても、愛する人といっしょにいたり、子ども作って彼らを守ったりしたいという「精神的に安定した生活」を意味する人もいれば、「犯罪や戦争を身近に感じ、自分の身を守ること」を指す人もいるなど、内容はバラバラだと感じました。戦争に関していうと、今、性自認・性指向に関して寛容になりつつある北米社会ですが、「内戦が起きた場合、標的にされてしまうかもしれない」という恐怖を語る学生もいました。

大学生が安定した生活を求める要因のひとつとして、政治情勢の不安定さがあるのではと私は考えます。トランプ政権は4年で終わり、バイデン

政権に移行したものの、トランプ元大統領は未だに選挙結果の不正を訴えており、コロナ禍の影響もあって経済状況も流動的です。先日の中間選挙からも、政治情勢の不安定さが伺えます。人工中絶やLGBTQといった、国を二分する議論が噴出しています。特に若者に関していうと、コロナ禍が学生生活に与えた影響が目立ちます。日本でも大学の授業がオンラインになったり、サークル活動ができなかったり、さまざまな影響が出ました。ここで参考になるのが、米国教育統計センターによる報告「2020年度米国高等教育学資援助研究」です。この報告は、「新型コロナウイルス感染症パンデミックが大学の在籍数や財政安定に及ぼした影響」を人口学的分類、大学の種類別に分析したものであり、これを読むことで、アメリカにおけるコロナ禍での学生生活についてうかがい知ることができます。

これによれば、アメリカの大学生の40%がパンデミックによる経済的な悪影響を経験し、4.4%が中退、3.8%が休学したことがわかります。また同報告は、学生の87.5%が履修登録に何らかの影響を受けたこと、84.1%が一部あるいはすべての講座が完全オンラインに切り替わった経験をしたことを明らかにしています。興味深いと感じたのは、この調査にマイノリティに対する視点が組み込まれていることです。「安定した住環境を見つけることが困難であった」と回答した学生の割合は同性愛者、性別非特定者に限定すると、9.1%、留学生に限定すると6.5%でした。大学を中退した学生の割合は、黒人学生が全体の7.2%で、白人の3.4%の2倍に上りました<sup>17</sup>。以上が、コロナ禍に関するデータです。

「仕事を探す際の不安、困難な点」についてみると、21人中5人が「経験の有無」、21人中7人が「給与額」と回答しています。

次に、アメリカにおける就職活動についてです。これについては、アリゾナ州立大学のサンダーバードグローバル経営大学院によるコラムを参考にしました。日本では「新卒採用」がとられています。アメリカでは「通年採用」が一般的です（ただし「新卒採用」もないわけではない）。日本とは異なり、ただ有名大学に入るだけでは企業に評価されず、入学後の学びが就活で重要になります。職務スキルが採用に影響しており、大学で学んだことを踏まえ、即戦力が重視されていると感じます。

次に若者の直面する収入と生活の関係についてです。アメリカでは、州によって生活費に大きな差があります。沿岸部には生活費が高い都市が相当あります。労働者の平均年収は58260ドル（約700万円）ですが、高い生活費に医療費などの諸経費を考慮すると、特に都市部では生活が厳しいです<sup>18</sup>。

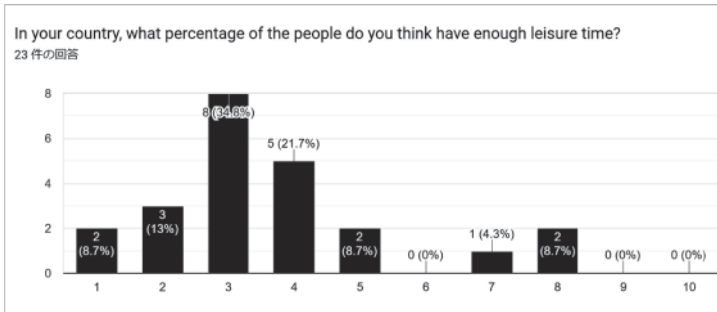


図 11

ここで学校におけるキャリア教育について説明します。「小学生から高校までにキャリアに関する教育があったか」という我々のアンケートの質問に対しては、半数が「高校までキャリア教育がなされていなかった」と回答しています。アメリカのキャリア教育はどのように行われているのでしょうか。2020年7月1日のNewsweekの記事によると、キャリアガイダンスを行う専門家カウンセラーが存在しているそうです<sup>19</sup>。日本では専門家ではなく教員がキャリア教育を行っていることを鑑みるとアメリカのほうがより力を入れているのかなと思います。ただカウンセラーがいる教育機関に通っている学生がアメリカでは82.3%、カナダで77%であったにもかかわらず、我々のアンケート調査では半数以上の生徒が「キャリア教育が行われていない」と回答していて、ずれが生じていると感じました。この原因は考察しきれなかったです。

次にライフワークバランスについてです。「自国のどれぐらいの割合の人々が十分に余暇を楽しんでいるか」という質問に対しては、10段階評価で、3が34%、4が21%で、この2つだけで半分を占める結果となっています。北米の大学生のあいだには、自国のライフアンドワークバランスが

仕事のほうに傾いてしまっているという認識が強いようです（図11）。

### 3. ゲストによるコメント

#### 3-1. 轡田竜蔵先生

**加藤（由）** それでは轡田先生からコメントをいただきます。

**轡田** 興味深い発表でした。準備が大変だったと思います。調査も海外とつないで壮大な調査ですね。お疲れさまでした。あまりにも多岐に渡る話なので、どうまとめていいか。世界の国、地域事情の違いも出ていました。国が違くと制度も違うので、若者の状況は当然ながら異なる。だが、むしろ、ここで私が一番注目したいと思うのは、これだけ多岐に渡る、世界中の若者の問題が、アメリカの話聞いていても、中国の話についても「これ、日本の話だ」というくらいに共通して語れるところが多くなっているということであり、そこから考えてみたいのです。

背景として、1990年代以降の加速度的なグローバリゼーションの影響をどう捉えるか。グローバリゼーションは地球規模化する、ある現象が瞬時にして地球全体に及んでいく現象を指すわけです。グローバリゼーションの歴史過程自体は古いですが、それが近年、加速度的になってきたと言われています。ハルトムート・ローザというドイツの社会学者が「加速社会」について議論していますが、3つのレベルの意味があります。「技術の進歩」が加速化していること、「社会の変化」が加速化していて、次から次と新しいことに対応しなければいけない。「生活のテンポ」が加速化して、忙しくなって不安から抜け出せない状態になっている。この3つのレベルの意味があります。加速度的グローバリゼーションの波に世界中の人々が巻き込まれている現状がある。そういう感覚が、少なくとも国境を超えた中間層以上に共有されている。国境を超えるグローバルエリートどうしの共感だけではなく、幅広い層に共感できる状況が広がっているということが新しい側面なのかなと思いました。

例えば、中国の若者論に関するプレゼンがありました。中国と日本の若者の世代論、ちょっと前まではタイムラグがあった。社会運動の話が話題になりましたが、その前に話題になったのは1989年の天安門事件を若者として経験した「六四世代」。その世代は日本の1968年の学生運動が盛んだった団塊世代と比較されたりしましたが、結構、タイムラグがあった。そして「八〇后（バーリンホー）」、1980年代以降に生まれた世代が、1960年前後生まれの日本の「新人類世代」に相当する「消費社会第一世代」、貧しさを知らない世代です。ところが、現在ではタイムラグはなくなって、90年代末以降生まれのデジタルネイティブを指す「Z世代」という概念は、日本と中国で似た定義で使われています。そういう意味で共通性が出てきている。

もう一つ、アメリカの「地域間格差」の話がありました。グローバルな格差問題を考える際、近代以降の南北問題の構造は継続していますが、それだけでなく、新しいタイプの国内の分断が広がってきていることに注目する必要があります。すなわち、グローバルエリートが集中している大都市の都心と、地方に住む学歴が低い人たちが多く労働者階級の多い地域との間の分断の問題の相対的比重が高まっている点です（マイケル・リンド『新しい階級闘争』等）。こういう点で世界の各国の様相が似通ってきているところがあると思います。今回の「不安」と「希望」というテーマについても、国境を超えて似通っている点について、まず注目してみましょう。

「不安」に関していうと、第一にグローバリゼーションに対応して柔軟な経済のあり方が求められるようになった結果、雇用が不安定になっているという文脈が重要です。中国でも「柔軟な就業」の広がり注目がなされていて、それが2億人、3億人の数になっている。日本でも非正規雇用やフリーランスの人の割合が増えている状況がある。就活も安定的ではなくなり、長期間、大学生が就活のプレッシャーに晒されるようになってきている。こうしたことも世界に共通した現象かと思います。「キャリア教育」に関していうと、日本のキャリア教育の教科書は「企業にいかんに入られるか」という面接対策が重視されていたりする。減少している

安定雇用のパイにいかにしてしがみつつかという点が重視されているのですが、それに対して、中国のキャリア教育の教科書を調べてみたところ、「起業の仕方、会社をつくろう」という章が必ずあって、これは日本と違うかもしれない。日本的雇用慣行の安定性の維持を第一に考える日本と異なり、政府も「柔軟な就業」の増加に肯定的で、より攻めているところがあります。

第二に、「グローバルエリート」は一握りで、「ローカルな経済を生きる労働者」の中間層以下との世界が分断しており、中間層の不安が高まっているという点も各国共通する構造があります。アメリカは平均収入700万円台だけど、そのレベルでも生活が大変だという話がありました。さらに地域間格差もありまして、ニューメキシコ、ミシシッピは400万円台で、倍くらいの格差があります。学歴格差もある。日本の平均年収はわかりますか。443万円。それも30年前に比べて下がっている状況で、平均レベルの中間層であっても不安を感じる状況があると思います。エリート大学では主に東京などのグローバル都市に暮らす「グローバル人材」になれば「勝ち組になれる」というイメージが煽られるのですが、実際には関西や地元本社のローカルな企業に就職して、右肩上がりに収入が増えていくことを期待もできず、将来の見通しにも不安を感じる層が同志社大学の卒業生にも結構、多いのではないかと思います。交差するいろんな世界の格差に思いを馳せて「ローカル経済を生きている労働者、貧困層」との間の「分断を超えた想像力」が求められているのですが、いくつかのプレゼンにあったように、若者は目の前の就職をゲットするために精一杯で、それも将来を見越して、どういう人生を送りたいかではなく、目の前のファーストキャリアのことだけで精一杯で、その後のことを考えられていない。こういう若者が、日本でも多いのではないかと。「他者に対する想像力を養おう」というのは、大学での学びでもよく聞く話だと思いますが、この文脈でいうと社会学者でアーリー・ホックシールドの『壁の向こうの住人たち』という本が興味深いです。リベラルなカリフォルニア大学バークレー校の教授なのですが、いわゆるトランプ現象に関する研究です。ホックシールドの身の回りにはトランプ支持者はいない。でも、アメリカの南



部はトランプを支持している人が多数を占める。「なぜトランプを支持しているのか」を合理的に理解したいと、敵地に乗り込んでトランプ支持者が多いルイジアナでインタビューをして、トランプ支持層が抱えている不安を理解する枠組みとしてのディープストーリーを捉えようとする。大事なのはそういう想像力だと思います。自分の目の前の不安に対応するだけで精一杯の大学生にとって、「自分と立場を異なる人への想像力」を大事にする余裕があるのだろうかと考えてみたいと思います。



轡田竜蔵先生（ゲスト）

第三の不安要因は、グローバルな時代ならではの社会経済の脆弱性です。グローバル経済は、国境を超えた助けあい、つながりから成り立っているが、世界のどこかで戦争があると、それが思わぬところにまで波及します。プレゼンのなかで、日本の若者は、あまりウクライナ戦争を意識していないという指摘がありました。実は結構、関係があって、例えば日本の木造の住宅費が上がっているのは、ロシアやウクライナから木材を輸入していることと関係している。戦争のリスクが、戦争当事者国以外にも瞬時に世界中に広がっていくのです。新型コロナウイルスが瞬時に世界に広がったことも、グローバル世界だからこそ、頻繁に人もモノもウイルスも行き来している中で、社会リスク要因は、国境を超えて共有されているということを気に留める必要があるかと思いました。

それでは一方、「希望」はどこにあるかという観点について。これも各地域のプレゼンの共通点にまず目を向けてみたいと思います。各地域の報告を見ていると、ブランド大学の出身者が多く、加速社会・競争社会のシステムに何とかついていって、「stable lifeを得たい」と思っている人たちがマジョリティだということが、垣間見えると思います。「不安」な世の中を個人の努力で抜け出そうとしているということです。しかし、競争というシステムは勝つ人もいれば、必ず負ける人もいて成り立つものです。調査報告をみると、このシステムを疑問視するというより「学歴とか人的資源を確実に身につけよう」と目指している人たちが主流です。中国の留

学生も顕著で、いわば「安定のためのパスポート」としての「留学」と言えるかもしれません。優秀な方もたくさんいますが、中国の国内で大学受験にうまくいかなかった人とか、国内だけでは安定のためのパスポートを得られないから留学してスペックを上げようとする人も少なくない。国に帰っても、海外と関係ない公務員になるとか、ドメスティックな仕事に就くということに目標を置く事例が多くなっているわけです。安定を得るために必死になっているところがある。ところが、グローバル経済の中で、少ない安定のパイをめぐる競争は勝ち目が見えづらくなっている。そうしたなか、先ほど中国の「タンピン（寝そべり族）」の例についての紹介がありましたが、これは面白い現象だと思います。グローバルな競争を煽る状況に対して、「このシステムに乗るとヤバイぞ」と思っている若者も少なくない。その生き方に共感が集まるとしたら、そこに実は「希望」があるかもしれないとも思う。中国政府の公式メディアでは「寝そべり族」は、「今時の若者は…」とネガティブな現象とみなされているようですが、「加速化するシステムに乗るのはマズイ」と気づいて北京や上海などの大都市を離れるなど、賢く動いている人たちなのかなとも思います。ダウンシフター的な選択肢、上手に社会の隙間を見つけて生きようとする人たちとも思える。私が研究している日本における地方移住のトレンドにも、共通するところがあります。加速化していく競争社会の隙間に、単に人的資本だけでなく、人々のつながりを上手につくって幸せに生きられる場所を広げていこうということですね。それも一つの方向だし、選択肢の広がりといえるのではないかと思います。これに関して、「キャリア教育」に関する話題が全報告者にありましたが、安定就職のための「人的資本を高める」以外に、どういうことを求めているか。単純に資格、専門性を身につけるといったこと以外に何もないのか。立ち止まって考えて、どういう生き方をしたいか、発表者の方々が何を求めているのかを聞きたいと思いました。

あともう一つ、「希望」として、若い人は移動ができる可能性があるということがあります。移動する選択肢がグローバル社会の中では広がっていくところがある。留学、海外体験が大衆的になり、国内的にも地域移動

のハードルが下がっている。社会学の調査でも「地域移動の経験をしたことがある人は、地元で動いたことがない人に比べると自己肯定感が高い」といった知見が得られています。いろいろな地域を経験している人は「生きる選択肢の幅が広い」というわけです。

デジタル技術が発展したことによって、遠隔地とつながる選択肢が広がってきたことも、今の世界の若者に共通する希望でしょう。もちろん、それが悪いことに使われることもあり、例えば中国のデジタル監視主義も問題ではあるんだけど、その反面、中国のゼロコロナ政策を改めるきっかけになった「白紙革命」も、デジタルなプラットフォームがあったからこそ成功したのだと思います。そういうものを若者は使いこなすことができる。

問題は、新型コロナウイルスの流行以後、移動によって選択肢を広めるという若者の希望のシナリオが、大きな試練を迎えている点です。もちろん、実際に移動することはできなくても、オンラインのコミュニケーションは広げていけるのではないかと考えられ、工夫がなされてきたと思います。しかし、実際、3年間を経てわかったことは、新しく世界の人々と出会う機会や生々しい体験が、リアルな場が失われると難しいところがあって、その価値が見直されているということです。留学に関する話題も出ていましたが、若者の「移動マインド」を萎縮させず、多様な価値観と触れ合っていくために、どんなことが可能か、思っていることがあれば各発表者に聞いてみたいと思いました。

**加藤（由）** ありがとうございます。轡田先生がおっしゃったように、若者の不安だけでなく、若者の希望もまたグローバル化するということかと思っています。若者自身が主体的にグローバルな価値観を求め、発信していくことで、少しずつ解決の糸口が見えるのかなと思いました。轡田先生のおっしゃる中国の「安定のためのパスポート」としての留学ですが、私の友だちも同じようなことを言っていました。

続きまして井上先生からコメントをお願いします。

### 3-2. 井上慧真先生

井上 みなさんのご報告を伺って事前にいただいたものを考えていましたら、コメントのほずが、質問ようになってしまったところもありますが。どれか一つ、二つ、お答えいただけると幸いです。ご報告の中でヨーロッパ地域の若者の「不安」と「希望」について第一報告で、具体的な「キャリアゴール」として「自分の専門分野、技能を生かした仕事に就くこと」を望む若者がいる一方で「仕事以外の自分のライフスタイルに見合った報酬を得られる仕事を」という回答も存在していたと思います。日本の学生が描くキャリアゴールと比べて「自分自身の思い描くキャリアゴールと、どういう共通点や差異が存在していたのか」ということを知りたいと思いました。



井上慧真先生（ゲスト）

ヨーロッパ地域の若者の「不安」と「希望」と北アメリカの報告ですが、これらの国々は「新卒一括採用」ではない就職プロセスからくる「学校から職業への移行の困難さ」が見られるなどと思いました。日本の場合、4月1日、みんなが入社する。同じカレンダーで選考を行って入社するのが一般的ですが、欧米諸国では「インターンシップ」とか「職務経験」を重視した採用が多いと思います。報告の中でも「採用されるのに必要な経験を積むのが困難だった」とか、ヨーロッパの報告の中でも「経験を積むことの不足」とか「インターンを希望しているが、すべてに望ましい機会がない」というお話もありました。日本は欧米諸国より円滑な「学校から社会への移行」があるということも、教育社会学での共通する知見だったと思います。しかし数年前から「インターンシップが選考材料として使ってもよい」と日本でもなってきた、勤務先でも2年生くらいからインターンシップに行く人がいます。日本でも状況が変化しているのかなと思います。

「希望する職につくための経験を積む機会」が大学生活の中でのインターン、留学もそうですが、それについて分析、調査されたことについて

て、よければ伺いたいと思いました。

3つ目の「教育制度のよいと思う点、変わってほしいと点」は、各地域で列挙されていて興味深いのですが、その中で分析されて、気になった回答があれば知りたいなと思いました。

調査結果分析の中で「分析」として書かれていなかったんですが、コロナの流行や戦争など、よりマクロな社会の変動によってライフプラン、進学する、留学するか、どういう職につくかを変更せざるをえなくなった若者たちがいたのではないかと思ったんですね。その意味では「希望の見直し」が起きてきているかなと。私の推測にすぎないのですが。

補足というか、自分自身が調べている中で、昔、見つけた活動を話題提供として。轡田先生のお話でも個人の努力によって抜け出そうとする話がありましたが、「不安」と「希望」をどのように政策に反映させるかというところも、個人的には昔から関心のあるところでイギリスの例をご紹介したいと思います。

伝統的に若者を活動の主体とする、日本にも入っているボーイスカウトやYMCAとかボランティア組織が多く存在していて、その活動は「ユースワーク」と呼ばれるのですが、学校から独立して経験の機会を提供している。英国青年議会のプロジェクトがありまして各団体から代表数名を募ってキャンペーン活動を行っている。そのテーマを、11歳～18歳の若者の投票によって決めている。全国にインターネット調査とか学校団体の調査で43万4492人が、投票を行ってまして、イングランド全体で7.06%の投票率です。キャンペーンとして扱ってほしいことの第一位が「健康とウェルビーイング」が、93023票、「仕事とお金」「教育と学習」と続いています。(注 zoom上で共有した資料<sup>20</sup>)に 実際の投票用紙をのせています。若者の「希望」「不安」を、どうすくい上げるか、こういう試みが日本でもあるといいのかなと、個人的には思いました最後にご紹介させていただきました。質問とコメント及び話題提供になってしまって恐縮ですが、以上になります。

**加藤 (由)** 井上先生、ありがとうございます。

**加藤 (結)** 様々なご質問をいただき、ありがとうございました。今回、研

究をする側にまわるなかで自分たち自身が「若者」であることを忘れそうになる部分もあって、自分を対象に含めて研究する機会は貴重なことだと思っています。

ご質問に対する答えですが、私個人にひきつけて答えさせていただきません。私は、現在ヨーロッパの大学院への進学を考えています。キャリアに関しては、文系の大学院で身につけた専門性を活かした仕事につけるかという「不安」があります。こうした専門性とキャリアについて、ヨーロッパの学生はどう考えているのでしょうか。アンケートからは、「自分の専門性を活かした職につきたいが、すぐに実現できるかわからないので、とりあえず、基本的なライフスタイルの充実を優先させたい」という傾向が読み取れました。ヨーロッパの国々は日本と違い、新人一括採用という制度をとっていません。しかし、そのヨーロッパでも、若者が必ずしもすぐに大学で身につけた専門性を活かせるとは考えていないことに気づきました。この点は、自分との共通点だと感じています。

#### 4. 全体ディスカッション

**加藤 (由)** フロアにいらっしゃる方々も交えて、さらにディスカッションをしていきたいと思います。気軽に挙手をお願いします。

**宇佐見** 私の年代だと就職が若者の不安のかなりの部分を占めていたと思います。一方、バブル時代には就職すること自体にはあまり不安はなかったと思うんですね。もし不安があるとすれば、それは望む企業にどのくらい行けるか、に関するものでした。これらの時代と比べて、現代の若者の就職への不安は、どのようなものなのでしょうか。アメリカやヨーロッパでは、日本のように受験で成功し、有名大学に入学さえできれば就職に有利ということはありませぬ。入学後に大学で何を学び身につけたかが、就職活動の際にも重要になります。日本では、採用を行う企業側が大学における学問内容や成績を重視しないことがひとつの問題だと思っています。皆さんは、学生として本学部で学んでいることと就職の関係についてどのように

考えていますか。

**加藤（結）** 現在、就職活動をしている立場から発言させていただきます。私自身、グローバル地域文化学部での学びが好きで、ここで得た知識を活かせるような職につきたいと思って活動しています。ただそうになると、どうしても関心が大企業に集中してしまいがちです。現代を生きる若者として、本学部で学んでいることを活かしたいのですが、現状としては厳しいと思います。

**加藤（由）** 私は1年休学して現在3回生です。本学部の1、2回生が就職と学問の関係をイメージするのは難しいのではと思います。グローバル地域文化学部には明確なディシプリンがある訳ではなく、入学当初から学ぶことが決まっているわけではありません。また、在学中の留学も必修です。1、2年生の段階ではどのようなテーマについて学ぶかがはっきり決まっているわけでは必ずしもなく、就活も出遅れる傾向があるのかも知れません。

**津田** 私自身、受験に関しては特殊な経験をしています。元々は医学部を目指していたのですが、このまま受験勉強だけが続けていては世界が見えなくなってしまうと思い、いったんこの学部に入りました。医学部においては、就活は医者になるという具体性をもっており、大学での学びの内容も最初から決まっています。しかし本学部では、自分が何がしたいのかを自分自身で見いだしていかないとけません。これはこの学部の特色ともいえますが、「不安」のひとつの要因にもなっています。1回生も終わりに近づいていますが、就活を見据えて周りからは「とりあえず資格をとったほうが良い」というプレッシャーを受け、自分と向き合えないといけなという葛藤が私の中で「不安」となっています。

**上田** 例えば医学部では医学、法学部では法律などという風に、他学部では学ぶ内容が最初からある程度決まっています。しかし、本学部は必ずしもそうではありません。自分自身で学ぶ内容を決めていくという意味で確かに難しい面もありますが、しかし逆に、自由に色々なことができるというメリットもあると思います。グローバルな社会に資する人材になるためには、ひとつのことに縛られない重要さも大事なのではないのでしょうか。

**加藤(由)** 他に質問のある方、お願いします。

**中野** グローバル地域文化学部ヨーロッパコース教員の中野幸男です。すばらしい発表ばかりでした。若い方々のあいでインタラクティブに議論してもらえればと思いますが、アンケートに関して引っかかった点もあり、教員の方から質問させていただきます。今回の講演会のタイトルでは「不安」が「希望」より先に出てくるのですが、やはりアンケートでも「不安」がより重要な要素として出てくるのでしょうか。それから、私としては、若者一人一人の個別的、具体的な話に関心があります。これから自分がしてみたいこととか、あれば教えていただけますか。

昔の若者だったら、モノが欲しい人が多かった。例えば、車とか。しかし最近の若者は「人と人とのあたたかいつながり」とか「ライブでの楽しい経験」とかが好きなんですね。皆さんはいかがでしょうか。

**加藤(由)** 私自身は、車や家のようなモノではなくて「経験」を求めています。具体的には、世界一周をしたいなと思っています。

**加藤(結)** 「不安」が先にくて「希望」について語りづらいのではないのか、というお話をいただきました。実際に私が読んだ論文のなかにも、「不安」ばかりを語ることによって社会全体が閉塞感に包まれてしまう危険性を指摘する論文がありました<sup>21</sup>。そのとおりだなと思いました。今回の調査を通じて、不安と希望は表裏一体だなと考えるようになりました。「希望」にはそれが叶えられないリスクが必ず付随しており、それが「不安」につながっていく。しかし、「希望」がないと生きていくことは難しい。この二つは、相互につながっていると感じています。

私個人の「不安」と「希望」には留学が深く関係しており、





「移動できること若者のひとつの希望ではないか」という議論に共感しました。私は、グローバル地域文化学部は留学が必修で当然のように海外に行けると思って入学しました。しかし、なかなか思うようにいかず、「希望」はついにはかなえられませんでした。コロナ禍もありますが、経済コストの問題もありました。私は私立大学に在籍している学生であり、貧困に苦しんでいるというわけではありません。かといって私費で自由に海外留学できるほど経済的余裕があるわけでもありません。具体的な「希望」があっても、それが微妙に叶わないかもしれないという「不安」について考えることは有意義だと思います。

**加藤（由）** 他に質問がありますでしょうか。

**高林** グローバル地域文化学部アメリカコース2回生の高林藍子です。すばらしい講演を聞かせていただき、ありがとうございました。アンケート調査結果からは、若者の多くが「不安」を感じる一方で、「大学で学んでいる」「弁護士になりたい」「研究者になりたい」等の「希望」も抱えていることが、ある種の逆説として紹介されていました。ただ、そのことに関しては、今回のアンケートの対象者が大学生ということを加味して考える必要があるのではないのでしょうか。つまり、大学生を「若者」の代表として考えて良いのかという問題です。日本でも、家庭の経済状況等の事情により大学に進学しなかった「若者」が多くいます。大学を出た人々が大企業や官庁にはいり、やがてその子供たちも大学に入ってキャリアを形成していきます。他方、多くの若者は経済的理由により自分の努力だけでは大学進学もままならず、「希望」を見いだすのが困難な状況にあるのではと思います。調査対象を低所得層に広げた時、若者がどこに「希望」を見いだせることができるのか、が気になりました。

**加藤（結）** ありがとうございます。恵まれない若者への支援をご専門とされている井上先生や、地方の若者の研究をされてきた轡田先生から何かございましたらお願いいたします。

**井上** 研究してきたのがイギリスですが、イギリスの東部と南部では経済水準が違いますし、地域格差もあり、銘柄大学と、そうでない大学、職業教育の違いもある。エリートは逆に「不安」が忘れられがちで経済的に剥奪

された人の方に注目がいきがちだけど、実は、エリートも「不安」を抱えているという意味では、こういう調査は意義があるのではないかと思います。

**轡田** 最初、加藤（結）さんからジョック・ヤングの議論を参照しながら指摘があったように、「エリートや中間層が不安を感じてなくて、低い層が不安を感じている」という捉え方ではなく、階級を超えて不安が共有されているという状況に注目しよう、と。貧困層の問題は確かにありますが、それを指摘するだけではダメで、生々しい声に、どうアプローチするか。方法的にも難しいところがあって、まずは世界とつながりを築くには、最近流行のデジタルの方法で、知り合いのつてを頼ってアンケートをとるのが簡単ですが、調査方法論からすると計量データとしては信用性がなく、評価できないものです。対象となる母集団とサンプリング方法が明確になっている状況が必要で、かなり慎重に設計しないとイケない。しかし、定性データと組み合わせることで、データを生かすやり方はあります。不特定多数に撒くことを手がかりとして、追加インタビューの協力者を発見する方法は、見つけにくい質的調査の対象者の選択肢を広げていく新しい方法として有効だと思ってます。私もふだん、Google Formsを使いたい学生には「それに加えてさらにインタビューし、自由記述と合わせて質的データとして分析するならいいけど、適当にばらまくだけではダメです」と指導しています。インタビューをして生々しい声を聴いてみると、計量調査のような形で一括りにはできないことがわかる。断片的な語りから導かれる解釈とずれているところも見えてくる。まず中間層のアプローチしやすい人から入って行って、そこから紹介で異なる階層の人に広がっていくこともあるので、ぜひ、それをしてほしいなど。私の社会学科での担当授業の社会調査実習では、「大学生以外」を条件として、京都府内の20～30代の若者を対象にした長時間の対面インタビュー調査を経験しますが、留学できないこととか、グローバル地域文化学部の場合、難しいですね。私はローカルな調査をしているので、緊急事態宣言が終わったら、その次の日から遠方に出かけてインタビューしていましたが、皆さんの場合、どう問題をクリアされているのでしょうか。

**加藤（由）** 私は1年間休学して留学しておりましたので、現地で知りあった方や友だち、クラスメイトなど人脈を使ってデータを集めました。それなりに深掘りのインタビューができたのではないかと考えています。

**藤浦** グローバル地域文化学部ヨーロッパコース1回生の藤浦茉胡と申します。アンケート調査の結果からは、「不安」と「希望」が表裏一体の関係にあると感じました。「希望」を強く感じつつも同時に「不安」も強く感じるという相関をどう考えればよいのでしょうか。「不安」について、個人の努力で抜け出そうとする動きが若者にみられるように思われます。私は、物価高騰とかコロナの蔓延とか、個人の力ではどうにもならない問題のために世の中に諦めを感じながらも、「希望」をもっていこうと思っています。皆さんが、どのようにして「不安」を個人の努力で抜け出せると思っているのか、教えていただきたいです。

**津田** 相関関係に関しては、これからさらに考えていければと思います。「不安」は一人の力では乗り越えられないと私も感じていて、特に政治の現状に関して憤りを感じる事が多々あります。重要なことは若者のあいだの連帯ではないかと思えます。私自身は十分に関わっているとは言えませんが、私の周りには政治に関心が高かったり、高校時代からボランティアに参加するなど、意欲的に社会と関わる若者が存在します。個人の力では乗り越えられない「不安」も、若者が力を合わせることで向き合うことができるかもしれません。そのためには、友人の輪を広げ、国、性別などに関係なく協力していける関係を築いていくことが「希望」につながっていくのではないかと考えています。

**加藤（結）** 轡田先生は著書のなかで政治参加と若者について言及されていたと思いますが、何かコメントいただけますでしょうか。

**轡田** リアルとオンラインを組み合わせるやり方を様々な工夫し、つながりをつくるということです。中国の「白紙革命」も歴史的なことで、中国の政策を変えるきっかけになったわけですから、つながりをつくることで政治を変える力にはなると思えます。政治意識に関する調査をしても、7割の人は、どう叩いても関心のない人です。地域活動や社会活動にも積極参加せず、政治や社会問題にも関心がないと自認する「サイレントマジョリ

ティ」です。そういう人たちも、深掘りしてみると、いろんな問題について考えながら生きている。これに関して、それをどう聞き取っていくかは学問をやる者としては試みていかないといけない。今回の世界の若者についての調査データも、自由回答からある程度想像はできるけど、心動くまではいかない。実際に対面して、じっくりと話を聴く、時間を共有すること、立場を超える人たち、異なる価値観の人たちと向き合う体験が大事なんだろうなと思います。

**加藤（由）** ありがとうございます。本日は学生と教員のそれぞれの立場から貴重なコメントをありがとうございました。最後に閉会の言葉を加藤（結）さんからお願いします。

## 5. 閉会の辞

**加藤（結）** みなさま、長い間、お疲れさまでした。以上をもちまして、本日のプログラムを終了させていただきます。本日の模様は本学部の紀要『GR』に掲載されますので、是非ご一読下さい。

最後に、学生の運営委員を代表して、皆様に感謝の意を申し上げます。急なゲスト招聘を快く引き受けてくださり、本日だけでなく準備段階から貴重な助言をくださった轡田先生と井上先生、本当にありがとうございました。様々なかたちで我々の活動を支えて下さったグローバル地域文化学部事務室の皆様にも深く感謝申し上げます。担当教員として私たちに寄り添ってくださった水谷智先生、坂本南美先生、ありがとうございました。アンケートの拡散にご協力くださったグローバル地域文化学部の先生方にも感謝申し上げます。そして最後に本日足をお運びいただきました会場のみなさまに心から感謝の意を表します。今後ともグローバル地域文化学部へのご支援、お力添えを、よろしく願い申し上げます。皆様の多大なご協力のもと、この会を締めくくることができました。それでは閉会とさせていただきます。ありがとうございました（拍手）。

## 注

- 1 山田昌弘『希望格差社会——「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房、2007年。
- 2 田辺俊介「希望は失われているのか？——格差と希望喪失の共犯関係」、佐藤香編『ライフデザインと希望』勁草書房、2017年。
- 3 ジル・ジョーンズ、クレア・ウォーレス『若者はなぜ大人になれないのか——家族・国家・シティズンシップ（第2版）』鈴木宏訳、新評論、2002年。
- 4 井上慧真『若者支援の日英比較——社会関係資本の観点から』晃洋書房、2019年、8頁。
- 5 ジョック・ヤング『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』、青木秀男訳、洛北出版、2007年。
- 6 轡田竜蔵『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房、2017年、39頁。
- 7 轡田竜蔵『サイレント・マジョリティを思考すること：広島二〇-三〇代調査から』、川端浩平、安藤丈将編『サイレント・マジョリティとは誰か——フィールドから学ぶ地域社会学』ナカニシヤ出版、2018年。
- 8 田辺俊介「希望は失われているのか？——格差と希望喪失の共犯関係」、佐藤香編『ライフデザインと希望』勁草書房、2017年。
- 9 中島由佳「就職不安が入職後の対応に与える影響——短大卒生と四大卒生との比較を交えて」『大手前大学論集』14巻、2013年、203-216頁。
- 10 外務省「(キッズ外務省)世界の学校を見てみよう！：ラオス人民民主共和国」、2013年。<https://docs.google.com/document/d/14qZJo51fxupxaj3L1k9Hq2eDEsleyt8N-8DubCs3daY/edit>（閲覧日：2023年1月31日）
- 11 文部科学省「我が国の義務教育制度の変遷」、2005年。[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1419881.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1419881.htm)（閲覧日：2023年1月31日）
- 12 自治体国際化協会（北京事務所）「中国の義務教育(自治体国際化協会 CLAIR REPORT NUMBER 325)」、2008年。[https://www.clair.or.jp/j/forum/c\\_report/pdf/325.pdf](https://www.clair.or.jp/j/forum/c_report/pdf/325.pdf)（閲覧日：2023年1月31日）
- 13 文部科学省「韓国の学校系統図」、2008年。[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryu/attach/1374967.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryu/attach/1374967.htm)（閲覧日：2023年1月31日）
- 14 外務省「(キッズ外務省)世界の学校を見てみよう！：フィリピン共和国」、2013年。<https://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/0310philippines.html>（閲覧日：2023年1月31日）
- 15 鼎泰銀通「疫情后，法拍房4年大增近187倍，每一套法拍房，都有一段辛酸史」、2022年。[https://www.sohu.com/a/579687723\\_121282794](https://www.sohu.com/a/579687723_121282794)（閲覧日：2023年1月31日）

- 16 齐鲁壹点「16至24岁调查失业率达18.4%！统计局：年轻人失业率偏」、2022年。  
<https://baijiahao.baidu.com/s?id=1735773066132839901&wfr=spider&for=pc>（閲覧日：2023年1月31日）
- 17 日本学術振興会「『ニュース・アメリカ』大学生の約25%、新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響を受けて卒業時期や卒業後の計画を変更（2022年9月7日）」『海外学術動向ポータルサイト』、2022年。<https://www-overseas-news.jsps.go.jp/2022/09/>（閲覧日：2023年1月31日）
- 18 BUSINESS INSIDER「生活費が一番高いのはどこ？地図で見るアメリカの地域別物価水準（2017年7月16日）」、2017年。<https://www.businessinsider.jp/post-34895>（閲覧日：2023年1月31日）
- 19 Newsweek「教師がキャリア教育まで担当する、日本の学校は世界でも特殊（2020年7月1日）」、2020年。<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2020/07/post-93829.php>（閲覧日：2023年1月31日）
- 20 British Youth Council, 2022, 'Make Your Mark' (<https://byc2016.wpenginepowered.com/wp-content/uploads/2022/03/UK-Youth-Parliament-Make-Your-Mark-Results-Report-2022.pdf>; Retrieved December 5, 2022)
- 21 田辺俊介「希望は失われているのか？——格差と希望喪失の共犯関係」、佐藤香編『ライフデザインと希望』勁草書房、2017年。

**日時**  
2022年  
**12月14日(水)**  
18:30～20:30

**会場**  
同志社大学烏丸キャンパス志高館SK110

**講師(コメンテーター)**  
**巒田 竜蔵先生** KUTSUWADA Ryuzo  
同志社大学 社会学部 社会学科 准教授  
 地域社会学・グローバル化リサーチセンター 若者研究  
**井上 慧真先生** INOUE Erna  
帝京大学 文学部 社会学科 講師  
 社会学・教育社会学 青少年問題

**タイムスケジュール**  
 1—趣旨説明・ゲスト講師紹介  
 2—学生会員による地域別調査プレゼン  
 3—ゲスト講師によるコメント  
 4—ディスカッション

**問い合わせ先**  
 グローバル地域文化学部3年生  
 加藤 結子  
 MAIL: cha11030@mail4.doshisha.ac.jp

第10回・同志社大学グローバル地域文化学会 学術講演会

グローバルに見る

若者の不安と希望

参加自由

●グローバル地域文化学部  
 生主催の今年度の企画として、  
 マスクの過程で、コロナ禍や  
 教育格差、さまざまな規模の  
 貧困・環境問題、年々、就職な  
 ど、さまざまな問題が挙げら  
 れた。立ち返って、このよう  
 なグローバルイシューに対  
 する共通した問題意識の根  
 底の一つには、各々のローカ  
 ルな背景をもつ「若者」とし  
 て、身近で喫緊の課題として  
 「人生設計」「不安」を抱え、  
 「希望」を見出す苦闘の姿態  
 があるのではないだろうか。

「若者の「不安」と「希望」、特  
 に教育・キャリア・人生設計  
 など」を切り口として、ゲスト  
 講師の名をお招きし、学部生  
 からなる学生会員と参加者との  
 対話を重視したインタラ  
 クティブな知的交際の場とし  
 て本講演会を位置付ける。

現代のそれぞれの地域の「若  
 者」もつ問題意識をグロー  
 バルな視点から議論する。

**同志社大学**  
Doshisha University

主催：グローバル地域文化学会 【教員】水谷智・坂本南美 【学生】米倉嘉穂・岡本京子・津田陽香・堤昭太・上田皇輝・加藤由佳・加藤結子

